

Nara Women's University

『今昔物語集』の北辺

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学日本アジア言語文化学会 公開日: 2020-05-19 キーワード (Ja): 安倍宗任, 今昔物語集, 前九年後三年合戦, 大宰府, 北辺 キーワード (En): 作成者: 千本, 英史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/5413

『今昔物語集』の北辺

千 本 英 史

一

青森県の十三湊を訪れた時の感銘は忘れがたい。

県の西北部、日本海に面し、川に流された砂、小石が長年にわたって堤状に堆積してできた砂嘴さしによって形作られた広大な十三湖じゅうさんこの湖口に築かれたこの地は、中世日本における北国第一の港町であった。

手元に残る見学資料によれば、二〇〇八年の九月のことである。当時奈良女子大学で事務局をお引き受けしていた説話文学会と、田嶋一夫氏が事務局をなさっていた仏教文学会（東部事務局）の合同例会であった。会場は弘前大学に着任されて間もない渡辺麻里子氏が引き受けてくださり、エクスカージョンに「中世都市十三湊と外ヶ浜の世界―国際港湾都市十三湊の史跡をめぐる旅―」が組まれた。

二〇一六年に惜しくも急逝された田嶋先生は、国文学研究資料館の立ち上げ時から参画して日本語の表記の策定などに奔走され、後年はいわき明星大学人文学部で教鞭を執られて、福島県下の多くの中学、高等学校教員を育てられた。それまでの日本古典文学史が京都（都）中心であり、せいぜいが東（関東鎌倉）を対抗的に設定するのに留まる（浅見和彦氏の名著『東国文学史序説』が著されたのは二〇一二年になってからである）ことを強く批判され、「これからは南北軸で考えていかななくてはならない」と強調されていた。私なども大きく影響を受けた。先生の勤められたいわき明星大学は、三・一一の東日本大震災時に福島第一原子力発電所からもっとも近距離にあった大学として甚大な被害を受けたが、さいわいというべきか風向きの影響などもあり、いわき地区の放射線量は比較的少量で、その後のいわゆる復興作業の拠点となることとなる。大学もまた県下の

一

高等学校の仮校舎を受け入れるなどして、拠点としての役割を果たした。しかし大学自体は、この四月からは大学名も経営母体名も変更され、薬学部、看護学部、健康医療科学部の三学部からなる「医療創生大学」に改編され、人文系の拠点としての役割は終了すると聞いている。

「南北軸」を視点として、平安から鎌倉の歴史的な背景と、その言語文化的面での取り込みや座標の再構築を考えることは、大きな主題であると考えなくてはいけないと思う。かつて私は大学院生時代に、非常勤で出講してくださった塚原鉄雄先生のもとで平安文学の基礎的な指南を受けたが、先生は『伊勢物語』の「東下り」について、第七段から第三段の「東国章段」とそれに連接する第一四段、第一五段の「陸奥章段」とでは、主題自体に変容が見られることを力説された。¹⁾このことは、時代における「南北軸」の視点を導入することによって、さらに離れて後に収載される第一一五段、第一一六段の「陸奥章段」の問題をも含め、定家本に至るまでの『伊勢物語』の改編、成立事情や、また『伊勢物語』における旧註以来の諸註の立場の解明にも繋がっていくものと思うが、私自身はまだ見通しを持っていない。

十三湊へのエクスカージョンのバス車中では、弘前大学の斉藤利男教授の懇切な説明があった。一連の北部東北現地を中心とするシンポジウムなどの中でも、ことに十三湊が全国的に注目される契機となった国立歴史民俗博物館での展示図録「企画展 幻の中世都市十三湊 海から見た北の中世」において、斉藤教授は「日の本將軍安藤氏の軌跡と活動」と題した論を寄せられ、「平泉藤原氏時代の安藤氏については不明だが、鎌倉幕府のもとでは、津軽下国・出羽上国（中略）の両安藤氏が幕府から蝦夷沙汰代官（蝦夷管領）に任じられ、とくに下国家は、室町時代になると「日の本將軍」と称されて、日本海交通の北のターミナル」かつ「アジア大陸からの北方ルートの玄関口」津軽十三湊を本拠に、北奥羽から蝦夷島にまたがる北方世界の支配者として君臨する」と述べられている。²⁾

見学会での私たちは、もっぱら同地が若狭の羽賀寺との直接の交流のあることに、「都（周辺）」と「辺境」という、旧来の枠組みでの興味を抱いていたかと思ひ出されるが、いま一つ私個人にとっては、松前藩の最古の文献記録とされる『新羅之記録』などで南部氏に攻められての安藤氏の滅亡について述べられていることが興味深かった。

(南部) 義政出張して嘉吉一(1431) 年秋十三之湊を攻め破りて津軽を乗取り、(安東) 盛季没落して左右に館籠ると雖も、無勢たるを以て防ぎ戦うこと克はず(中略)、同三(1435) 年十一月十日秋の嶋に北渡らんと欲するの処、冬天たれば順風吹かず難儀に及べり、粵に道明法師天を仰ぎ地に俯し、肝胆を砕くに、忽ち天の加護有り巽風吹いて出船す。跡より軍兵追い来れども船洋沖に浮ぶに依て力及ばず引き退く。盛季虎尾を踏むの難を遁れて渡海す。

これについては『満濟准后日記』では十年余り前のこととするが、いずれにせよ、一五世紀半ばに安藤氏は蝦夷北海道へ渡海して十三湊を後にするのである。そうしてこの本州最北端の地の武人の蝦夷北海道への渡海という史実は、すぐに『今昔物語集』巻三一の「陸奥国安倍頼時、行胡国空返語」を思い起こさせるだろう。

二

松浦武四郎の『蝦夷年代記』(多気志楼蔵版1870)は、神代から江戸末に至る、大和朝廷とアイヌ民族との交渉関係を年表化した労作だが、その冒頭に掲げられた関係図に、「諏訪縁起

唐子島」の下方に、「今昔物語 胡国疑是」と表記される。⁽¹⁾「諏訪縁起」はもちろん『諏訪大明神絵詞』だが、「今昔物語」はこの『今昔物語集』巻三一一「陸奥国安倍頼時、行胡国空返語」を指すのであろう。『今昔物語集』は、実地に北方の地を廻ってアイヌ民族と交流した北方探検家として知られる松浦武四郎によっても注目され、その説話は「史実」の一つとして記録されていたのである。

此ノ奥ノ方ヨリ、海ノ北ニ幽ニ被見渡ル地有ナリ。……我レヲ難去ク思ハム人ノ限ヲ相具シテ、彼ニ渡リ住ナム陸奥守源頼義との抗争を避けようと、安倍頼時は「大キナル船」に「頼時ヲ始テ、子ノ厨河ノ二郎貞任、鳥ノ海ノ三郎宗任、其ノ外ノ子共、亦、親シク仕ケル郎等二十人許」、⁽²⁾「其ノ徒者共、亦食物ナド為ル者、取合セテ五十人許」で、津軽海峡を渡って新天地を目指そうとする。

この話については、私は四半世紀の以前、平凡社ライブラリー版の萱野茂氏の『ひとつぶのサッチポロ アイヌの昔話』(平凡社名作文庫1979)が平凡社ライブラリーから『アイヌの昔話ひとつぶのサッチポロ』と題名と副題を入れ替えて再版された時(1998)、元版にあった水四澄子氏のおよそ四十図にのぼる挿絵は、

「ブクサの魂」で娘が干してあったブクサ（行者にんにく）の葉を手にとる場面が表紙カバーに用いられた以外は省略されている）に、解説として「神とつらなる世界のものがたり」という文章を書かせていただいた際に、引用して述べたことがある。⁽⁸⁾ 私としては、それなりにアイヌの口承文芸や萱野氏の他の著作などについても学び執筆はしたものの、『今昔物語集』成立時の北海道がアイヌ文化に先立つ擦文文化段階であるという大前提をもちきんと踏まえ、頼時たちが直接にアイヌ文化と接触するもののように述べていた（もっとも擦文文化とアイヌ文化は土器などの用具において截然と区分されるが、それを担った人種としてはどのような重なりあい、また区分されるかは、今もなお判然とはしないようである）。この解説は極めて不十分で、萱野氏は苦笑されたのではなかったかと今になって申し訳ない思いが強い。確認するまでもないが、二〇〇六年に逝去された萱野茂氏は、アイヌ民族として沙流郡平取町二風谷にふたにに生を受け、一九七五年の菊地寛賞を受賞した『ウェペケレ集大成』、一九九八年の毎日出版文化賞を受賞した『萱野茂のアイヌ神話集成』（全十巻）の刊行などアイヌ文化研究を生涯の仕事とし、また当時の日本社会党から参議院議員に出馬当選して、先頭に立って「アイヌ文化振興法」

（1997）の成立を実現した人であった。

また『今昔物語集』のこの話は、続く一二話「鎮西人、至度羅島語」と対応して、当時の日本の南北の両端を示すものとして知られるが、その話末詞書は、「然レバ、胡国ト云フ所ハ、唐ヨリモ遙ノ北ト聞ツルニ、「陸奥ノ国ノ奥ニ有、夷ノ地ニ指合タルニヤ有ラム」ト、彼ノ頼時ガ子ノ宗任法師トテ、筑紫ニ有ル者ノ語ケルヲ聞継テ、此ク語り伝ヘタルトヤ」と語り納められている。

私は小峯和明氏編の『歴史と古典 今昔物語集を読む』⁽⁹⁾中の「都と地域・辺境」という章でこれらを扱いながら、「都」の景勝も南北の「辺境」叙述もうまく展開することができず、池上洵一氏の同書書評では、「近年研究の進化が著しい平安京の地域論を「史料総覧」で祖述するのはいかにも季節遅れの感を免れまい」と厳しく指弾された。まことにもっともなことと反省している。

さて、安倍宗任は、源義家の実父で東国における源氏一門の礎を固めた陸奥守源頼義（988-1075）によって、前九年合戦で敗死した「六箇郡（北上平野中央部、伊沢・和賀・江刺・稗抜・志波・岩井）の司」（『陸奥話記』⁽¹⁾）の安倍頼時（頼良、?-1067）の三

男で、次男の貞任（1019-1063）のすぐ下の弟となるが、母親は異なるらしく、樋口知志氏は、宗任こそが「頼時の嫡子格とされた」といい、「女系の親族関係で清原氏と繋がっていたため」、「貞任に対してきわめて苛酷であった源氏・清原氏軍が、一方で安倍氏嫡宗の継承資格を有していた宗任に対してはかなり寛容であった」とする。

宗任の軍事行動は、樋口氏もすでに同書で整理されているが、『陸奥話記』を見てもあまり積極的なものとはいえないようである。

康平五（1063）年八月十六日、追討將軍源頼義の執拗な加勢要請を受けた清原武則が「遙に皇城を拜して」、「臣既に子孫を發して、將軍の命に応へつ。志は節を立つるにあり、身を殺すことを顧みず」と天地に誓ったのに対して、「今日鳩あり、軍の上に翔る。將軍以下悉くこれを拝せり」という源氏勢の勝利を示す「奇瑞」が現じたあとに、

翌日同じき郡の萩の馬場に到りぬ。小松柵を去ること五町有余なり。件の柵はこれ宗任が叔父の僧良昭（後に宗任らと共に大宰府に流される）が柵なり。日次宜しからず、并に晩景に及るによりて、攻め撃たむの心なし。

『今昔物語集』の北辺

とあって、即座には攻撃に移っていないのも、宗任関係の拠点であったことが影響しているかもしれない。

『今昔物語集』巻二五―一三「源頼義朝臣、罰安倍貞任等語」は、『陸奥話記』を抄出したものだが、それに続く後三年合戦を描いたらしい第一四話「源義家朝臣、罰清原武衡等語」は、諸写本ともに題目だけが記され、本文は欠文となっており、ここで『今昔物語集』の巻二十五は中断されている。

奥州平泉政権成立に至る過程の今日の歴史研究では、永保三（1083）年に勃発した後三年合戦に先立って延久二年（1070）年に起きた延久二年合戦（後三条天皇のもとで復権を果たした源頼義・義家父子と、陸奥守源頼俊と奥六郡主清原貞衡との間で闘われた、主導権争い）も重視されるが、『今昔物語集』にはこの合戦についての記述もない。『今昔物語集』の作者は、延久二年合戦についての情報も得ることができなかったようなのである。

周知のように、全話数で一千話を超える現今の『今昔物語集』は、一一二〇年以降の成立という一二世紀初頭作品でありながら、そこで扱われる事柄で一二世紀に下るものは二例しかなく（巻二〇―一四「康和三二〇一年・巻二六―一四〇「長治二二〇五年」）、しかも両話ともに後三年合戦の場合と同じく、題名のみ記され、

本文は欠文になっている。¹⁵⁾

卷二五の北辺の地をめぐる合戦譚の記載とその断絶もまた、『今昔物語集』の成立にかかわる大きな材料であることは疑えない。

三

もう一度、安倍宗任に視点を戻そう。

十三湊を支配した安藤氏については、いくつかの系図が伝えられるが、その一つの『安藤系図』¹⁶⁾では、「鳥海弥三郎」として宗任の名をあげ、その女子について「基衡妻。秀衡母。奥州観自在王院本願主」であるとして、奥州藤原氏への血脈を示している。

かつては安倍氏を、東北現地の蝦夷を代表する武人として構想することが多かった。たとえば作家の今東光が書いた「前九年・後三年の役」¹⁷⁾では、今東光は「津軽人の両親から生まれ、中尊寺の住職」となった自らを「東夷の沙門」と呼び、「筆者は蝦夷史を按ずるに、なんとも悲しい話だが、彼らは何世紀にもわたって叛逆しつづけ、そのたびに多くの犠牲を払いながら、つねに敗北の歴史を綴ってきた」と、安倍氏を初めとする諸勢

力と自らの立場を重ね合わせて、叙述を進めてさえいる。しかしながら、今日の研究では安倍氏をそのまま在地の蝦夷勢力と見なす見解は少なく、都の文化を受容し得る出身・立場を想定する向きが多い。さらにその中でも三男宗任に関しては、次男の貞任以上にその安倍氏の嫡流として認識されていたようである。¹⁸⁾

『古今著聞集』三三八(武勇)「源義家、安倍宗任を近侍せしむる事」など、鎌倉期の説話において、宗任が義家から絶大な信頼を受け、親和性を十全に發揮していることは、一見するとその人物像と齟齬しそうでも、じつは何の不思議でもなかったかもしれない。¹⁹⁾

『今昔物語集』卷三一―一「陸奥国安倍頼時、行胡国空返語」の話末詞書に、「宗任法師トテ、筑紫ニ有ル者」とあることは史実と認めてよい。

『百鍊抄』には

(康平七(1066)年)三月廿九日。伊予守頼義、自奥州相具所上洛之降虜宗任等、有レ議、不レ令入京、分遣国々。宗任、家任、遣伊予。(中略)治暦三(1067)、宗任等、移遣大宰府。依レ下欲逃帰本国之聞也。²⁰⁾

とあり、また『朝野群載』には同日づけの「太政官符」が載る。少し長くなるが、基本史料として確認しておきたい。

太政官符 伊予国司

応_レ安_ニ置便所_一。帰降俘囚安倍宗任。同正任。同貞任。同家任。沙弥良増等五人。従類参拾貳人事

宗任従類 大男七人

正任従類廿人 大男八人 小男六人 女六人（以下略）

右得_ニ正四位下行伊予守源朝臣頼義_一。去月廿二日解状_ニ称_一。

謹檢案内_一。帰降之者。先日注_ニ交名_一。早経言上_一。随則被_レ下_ニ給官符_一称。件人等可_レ随_ニ後仰_一者。於_ニ陸奥国_一。

雖_レ待_ニ裁下_一。既無_ニ左右_一。仍抽_ニ為_レ宗故俘囚首安倍頼時

男五人_一。隨身所_ニ参上_一也。抑宗任破_ニ衣河関_一之日。去鳥

海之楯籠_一兄貞任_ニ姫戸之楯_一。相共合戦。然而貞任等被_レ誅

戮_一間。被_レ疵逃脱。其後棄_ニ抛兵仗_一。合掌請_ニ降_一。即跪_ニ陣

前_一。悔_ニ前惡_一。（中略）件宗任等忽悔_ニ旧惡_一。已_レ為_ニ降虜_一。

推_ニ其情趣_一。何_レ不_ニ矜憐_一。宜_レ仰_ニ彼同党類_一。相共移_ニ住便

所_一。永_レ為_ニ皇民_一。支_ニ給衣糧者_一。国宜_ニ承知依_レ宣行_レ之。

路次之_レ国。宜_レ給_ニ食馬_一。符到奉行。

左中弁藤原朝臣泰憲 右大史小槻宿禰孝信

『今昔物語集』の北辺

康平七（1066）年三月廿九日^①

大宰府へ逃れた後の宗任については、地元宗像の安川浄生氏に、古跡を丹念に探索した労作があり、また他に研究論文として鈴木彰氏などの論も備わる。^②

『今昔物語集』巻三二のこの話と『宇治拾遺物語』一八七「頼時ガ胡人見タル事」とは同文話とされて処理されることが多いが、表現面ではかなりの差異が見られる。ずいぶん乱暴な比較であることを承知の上で、岩波の新日本古典文学大系で本文を比較してみると、『今昔物語集』では四十四行であったものが『宇治拾遺物語』では三十三行に縮められている。『今昔物語集』で「彼ノ頼時ガ子ノ宗任法師トテ、筑紫ニ有ル者ノ語ケルヲ聞繼テ、此ク語り伝ヘタルトヤ」と話末詞書に書かれた情報は、『宇治拾遺物語』では「宗任法師として、筑紫にありしが語り侍ける也」と冒頭部分に移され、

・其レニ乗テ行ケル人ハ、頼時ヲ始テ、子ノ厨河ノ二郎貞任、鳥ノ海ノ三郎宗任、其ノ外ノ子共、亦、親シク仕ケル郎等二十人許也。其ノ徒者共、亦食物ナド為ル者、取合せテ五十人許、一ツ船ニ乗テ、暫ク可食キ白米・酒・菓子・魚・鳥ナド、皆多ク入レ拈_レテ、船ヲ出シテ渡ケレバ、其ノ

被見渡ル地ニ行着ニケル。

・然テ、船ノ者共、頼時ヨリ始メテ、ニ云合セテ、「極ク此ク上ルトモ、量モ無キ所ニコソ有ケレ。亦、然ラム程ニ自然ラ事ニ値ナバ、極テ益無シ。然レバ、食物ノ不尽又前ニ、去来返ナム」ト云テ、其ヨリ差下テ、海ヲ渡テ本国ニ返ニケル。

といった表現は削除されてしまふ。

このことは、逆に言えば、『古今著聞集』に近接した一三世紀の成立になる『宇治拾遺物語』に比して、『今昔物語集』ではこの宗任の「語り」がよりいきいきと伝えられているということの意味しているといえるのではないだろうか。

もとより、宗任自身がこの話を伝えたといっているわけではない。安倍頼時も次男の貞任も前九年合戦で敗死しており、宗任とともに「胡国」に渡ることはありえない。しかし、宗任の大宰配流後のかの地でのその勢力の定着ぶりを勘案すると、その流れを伝える人々のうちに、ちょうど三世紀半後の安藤氏が津軽海峡を渡ったように、安倍氏一族が渡海を試みたといった伝承が語られることは、むしろ自然なことであったのではなからうか。

先年、『今昔物語集』の成立に関して、『弘誓法華伝』と『俊頼髓脳』に関連して考えたことがあった。源俊頼が大宰府に下ったことは、よく知られている。そのように考える時、『今昔物語集』の成立に、大宰府という地の果たした役割を考えることは、はたして無謀であろうかと考えてみる。

注

- (1) 塚原鉄雄『伊勢物語の章段構成』新典社1988 第四章「状況設定と対応情事―勢語東国と勢語陸奥―」
- (2) 「企画展 幻の中世都市十三湊 海から見た北の中世」国立歴史民俗博物館1998
- (3) 『新北海道史』第七巻史料1 1969所収、引用は同書の読み下しによる。
- (4) 『松浦武四郎紀行集中』富山房1975
- (5) 『日本庶民生活史料集成一 第26巻』三一書房1983
- (6) 『今昔物語集』の引用は、岩波新日本古典文学大系の本文による。
- (7) 松浦については、花崎皋平『静かな大地 松浦武四郎とアイヌ民族』岩波1988をはじめとして近年多くの研究が積み重ねられていること、周知のとおりである。

- (8) 菅野茂『アイヌの昔話ひとつぶのサッチポロ』平凡社ライブラリー 1983
- (9) 小峯和明氏編『歴史と古典 今昔物語集を読む』吉川弘文館 2008
- (10) 池上洵一『書評』小峯和明編『今昔物語集を読む』説話文学研究第四十四号 2009.7
- (11) 『陸奥話記』は旧来、群書類従本が主に参照されてきた(梶原正昭校注『古典文庫 陸奥話記』現代思潮社 2008 など)が、近年貞享元(1684)年写本(当本を底本とするものとしては日本思想大系本がある)が重視されつつある。
- (12) 樋口知志『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』高志書院 2011
- (13) 岩波日本思想大系『古代政治社会思想』1979 所収「陸奥話記」(大曾根章介校注)
- (14) 樋口知志編『東北の古代史 5 前九年・後三年合戦と兵の時代』吉川弘文館 2016 など
- (15) 拙稿『今昔物語集』永遠の未完成の魅力』国文学解釈と鑑賞 七二巻八号 2007.8 に要点をまとめておいた。
- (16) 続群書類従第七輯下『安藤系図』
- (17) 『戦乱 日本の歴史2 辺境の争乱』1977 所収。小学館から全一一巻で出版されたこの異色のシリーズは、「蘇我戦記」

『今昔物語集』の北辺

- (黒岩重吾) から「西南の役」(豊田權)まで一巻に三つずつその時代を代表する「戦乱」を選び、和歌森太郎、上田正昭、原田伴彦、奈良本辰也などの歴史家も含まれてはいるが、基本的に「文学者」たちが論を進めるという構成であった。ちなみに『国史大辞典』などでも立項されている「前九年の役」「後三年の役」といった言い方も現在ではそれぞれ「合戦」という言い方が標準となっているようだ。
- (18) 先掲注(12) 樋口知志『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』高志書院 2011
- (19) 『古今著聞集』では、三三六話で義家が衣川の闘いで、安倍貞任と連歌を詠んだ話に続けて、三三七話の大江匡房に兵法を学んだ話を挟み、三三八話では(1) 降人となった宗任を「優してつか」い、狐狩りに際して箭を持たせて平然としていたこと、(2) 宗任一人だけを連れて「女のもとへ行き」、数十人の強盗に襲われたが宗任の活躍で難を逃れたことが記されている。「武士」の概念自体が大きく変化している。高橋昌明氏(もっとも広く読まれている最新の成果として、岩波新書『武士の日本史』2008をあげておこう)の一連の研究によって、かつての「領主制論」に基づく「武士」像は大きく訂正を求められており、その歴史研究に寄りかかった『今昔物語集』も、再考が必要な段階に来ていることは疑えない。

- (20) 新訂増補国史大系『百鍊抄』
- (21) 新訂増補国史大系『朝野群載』(第十一延尉)
- (22) 安川浄生『安倍宗任 伝説と史実との接点を求めて』みどりや仏壇店出版部 1983、「奥州・安倍宗任の生涯」日本及日本人一六四四号 2002.5 (岩手県歴史研究会編『終焉九五〇年記念 平和祈念祭 前九年合戦シンポジウム』2013に再録)
- (23) 鈴木彰「平戸松浦家にとつての「剣巻」―松浦党安倍宗任 末裔説をめぐって」古典遺産六一号 2012.3
- (24) 拙稿『弘誓法華伝』をめぐって」小峯和明監修、金英順編『シリーズ日本文学の展望を拓く1 東アジアの文学圏』笠間書院 2017
- (25) 池田富蔵『源俊頼の研究』桜楓社 1973の第四編「俊頼と「説話歌」論考」第二章付載の「源俊頼年譜」では嘉保二(1085)年の項に、「大宰権帥として赴任する父経信に従って筑紫に下向」と、『中右記』七月二日条(大日本古記録第二巻に「此暁帥大納言為被赴任出洛中云々」とある)を参照してあげている。同年譜によれば帰京は一年半後の永長元(1097)年春のことであった。

——ちもと ひでし・本学教授